



聖母の被昇天 (ルカ 1:39-56)

憐れみを忘れない神の働き

聖母の被昇天の祝日を迎えました。マリアを祝い、マリアのもとにとどまるということは、どんな意味合いがあるのでしょうか。与えられた朗読を通して考えてみましょう。

朗読の後半、46節から56節にかけては「マリアの賛歌」と呼ばれる個所です。マリアが言葉に表した世界が、わたしたちにどのようなつながるのかが分かれば、わたしたちがここにとどまる意味も理解できるようになり、8月15日にミサに集う意義と価値を人々に語って聞かせることもできるでしょう。

「マリアの賛歌」はマリアの個人的な体験から始まります。「身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださった」(1・48)。それはマリアの個人的な体験でしたが、そこから神の働き方を見たのです。旧約時代、人々が神の声に耳を傾けない中、神に忠実なノアとその家族に目を留め、洪水が地上を覆って、ノアの家族だけが救われました。

アブラハムはカルデアのウルから出た小さな部族でした。エジプトという大国にあって虐げられていたイスラエルの民を救い出し、エッサイの子供たちの中で末の弟に目を留め、イスラエルの王となさいました。人々が目を留めるものには目もくれず、人々から低く見られていた部分に目を留めるお方だと理解したのです。

マリアは、自分の個人的な過去の体験から神のなさり方を知ります。過去から現在に至るまで、神は思い上がる人、権力をふるう人、富める人ではなく、身分の低い人、飢えた人に近づいてくださるのです。そしてこの小さな人々に寄り添う態度は、未来にも変わらない。これがマリアの理解した神の働き方でした。

わたしたちも、今こうしてマリアの賛歌を聞きながら、神のなさり方は過去現在未来、変わらないということを知りました。わたしたちはなぜここに集まっているのでしょうか。それは、マリアが声を上げた神のなさり方を、わたしたちもいっしょになって讃えるためなのです。

わたしたちは見物人でしょうか。マリアの賛歌を聞きながら、なるほど神のなさり方はそうなのかと理解し、それでもなおマリアのそばを通り過ぎるのでしょうか。そうであってははいけません。わたしたちがマリアを祝い、マリアのそばにとどまるのは、マリアが体験し、理解したことを現代に向かって証言するためです。

神のなさり方は今も変わらない。世の人々がほめたたえ、あこがれる人々の脇を神は通り過ぎ、低いとされている者、取るに足らないとされている存在のもとへやってくる。わたしたちは神のこのような働き方を讃えますと、ミサの中で表明するのです。

これをひとこと言うなら、「憐れみを忘れない神の働き」と言えるでしょう。わたしたちはこの世がほめたたえる生き方に立たず、「憐れみを忘れない神の働き」を讃える「新しい神の民」なのです。